



パフォーマンス監視の基本設定  
AdRem NetCrunch14 参考資料



## 内容

<b>1. パフォーマンス監視の概要</b> .....	<b>1</b>
<b>2. パフォーマンスの監視方法</b> .....	<b>1</b>
2.1. SNMP 監視の設定 .....	1
2.2. OS 監視の設定 .....	1
<b>3. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベント</b> .....	<b>2</b>
3.1. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントの定義 .....	2
3.2. イベント条件の設定 .....	3
<b>4. パフォーマンストレンド</b> .....	<b>4</b>
4.1. パフォーマンストレンドの利用方法 .....	4
<b>5. レポート</b> <b>4</b>	
5.1. レポートの設定方法 .....	4
5.2. レポートビューア .....	5
<b>6. 仮想パフォーマンスカウンタ</b> .....	<b>6</b>
6.1. 仮想パフォーマンスカウンタの定義 .....	6
6.2. 仮想パフォーマンスカウンタの使用法 .....	6
SNMP 監視の場合: .....	7
OS 監視の場合: .....	7

## 1. パフォーマンス監視の概要

本資料では、AdRem NetCrunch 14.x日本語版(以下 14)におけるパフォーマンス監視について、一般的に利用される基本的な設定を記載します。ご利用の NetCrunch のビルド番号が異なると、仕様の変更により動作や設定などが異なる場合がございます。あらかじめご了承ください。

## 2. パフォーマンスの監視方法

NetCrunch では、SNMP 監視や一部 OS (Windows、Linux、BSD、Mac OS、VMware ESXi、Soralis) へのエージェントレス監視機能を使用して、パフォーマンスの監視を行うことができます。

### 2.1.SNMP 監視の設定

SNMP 監視の設定手順を以下に例示します。

1. ノードを右クリック→[ノード設定]を選択します。
2. 新しく開いたウィンドウの[監視]タブの[SNMP]欄の右端にて[有効化]をクリックします。  
※[有効化]が表示されていない場合は、すでに SNMP 監視が有効化されております。
3. [SNMP]欄の右端にある歯車のアイコンをクリックします。
4. [SNMP]ウィンドウにて[SNMP プロフィール]などを設定の上、[保存]をクリックします。

手順[4.]の[SNMP]ウィンドウの左上のストップウォッチアイコンに表示されている時間は、SNMP 監視の間隔を示しています。ストップウォッチアイコンをクリックすると、SNMP 監視の間隔を編集することができます。また、[SNMP]ウィンドウの左上のアイコンをクリックすると、SNMP 監視を無効化できます。

SNMP プロフィールは、メインメニュー→[NetCrunch]→[監視]→[SNMP コミュニティとパスワード]にて編集することができます。

### 2.2.OS 監視の設定

OS 監視は、NetCrunch に対象 OS (Windows、Linux、BSD、Mac OS、VMware ESXi、Soralis) の認証情報を設定することで、エージェントを使用せずに監視対象からパフォーマンスなどのデータを収集する機能です。Windows 監視については、別紙『NetCrunch の WINDOWS 監視 ドキュメント』をあわせてご参照ください。

OS 監視の設定手順を以下に例示します。

1. ノードを右クリック→[ノード設定]を選択します。
2. 新しく開いたウィンドウの[監視]タブの[OS 監視]欄の右端にて[有効化]をクリックし、対象の OS を選択します。  
※[OS 監視]の項目がなく、[Windows]などが表示されている場合は、すでに OS 監視が有効化されております。
3. 各 OS の項目に右端にある歯車のアイコンをクリックします。
4. 新しく開いたウィンドウにて[認証プロフィール]などを設定の上、[保存]をクリックします。

手順[3.]の各[OS]ウィンドウの左上のストップウォッチアイコンに表示されている時間は、OS 監視の間隔を示しています。ストップウォッチアイコンをクリックすると、OS 監視の間隔を編集することができます。また、各[OS]ウィンドウの左上のアイコンをクリックすると、OS 監視を無効化できます。認証プロフィールは、メインメニュー→[NetCrunch]→[監視]→[監視認証マネージャー]にて編集することができます。

## 3. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベント

パフォーマンスカウンタから取得した値によってアラートを生成したい場合には、パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントを利用できます。

### 3.1. パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントの定義

イベントの定義方法について以下に例示します。

以下の手順では例として、新たに作成した監視パックに対してイベントを追加しておりますが、ノードやノードグループポリシー、自動監視パックにイベントを追加することも可能です。また、既存の監視パックを編集することも可能です。

1. メインメニュー→[NetCrunch]→[アラート通知]→[監視パックとポリシー]を選択します。
2. [監視パックポリシー]ウィンドウの[監視パック]タブにて、監視パックを作成したいフォルダを選択し、フォルダ画面左上の[+]ボタンをクリックします。
3. [アラート&レポート設定の作成]ウィンドウにて、[監視パック]をクリックします。
4. [監視パックの設定]ウィンドウの[データ収集のアラート]タブ→[アラート]タブにて、[アラートの追加]をクリックします。
5. [監視イベントの追加]ウィンドウの各タブから、[新しい\*\*\*パフォーマンスカウンタのイベント]をダブルクリックします。  
※「\*\*\*」には Windows や SNMP などが入ります。
6. [アラートルール]ウィンドウにて必要に応じて設定を行い、[OK]をクリックします。

7. [監視パックの設定]ウィンドウの[割り当て]タブにて、[ノードの追加]をクリックします。
8. [ポリシーにノードの追加]ウィンドウにて、監視パックを割り当てるノードを選択し、[OK]をクリックします。  
※チェックボックスを利用して、ノードを複数選択することも可能です。
9. [監視パックの設定]ウィンドウにて、監視パックの名前やイベントに対するアラートアクションなど、必要に応じて設定します。

手順[6.]では、<カウンタの選択>にて監視するカウンタを設定します。SNMP 監視の場合は、OID とインスタンスを手動にて入力するか、MIB データベースから選択することが可能です。また、定義済みカウンタでは、ソースノードを指定し、[仮想パフォーマンスカウンタ](#)など NetCrunch 上に定義されているカウンタを使用できます。OS 監視の場合は、ソースノードを指定するとカウンタ、インスタンスが表示されます。表示された中からカウンタ、インスタンスを指定します。

### 3.2. イベント条件の設定

パフォーマンスカウンタのしきい値違反イベントを定義する際、イベント条件の項目にてイベントを生成する条件を設定します。新たにイベントを設定する際、デフォルトの条件タイプは[しきい値]となっていますが、プルダウンメニューから変更することが可能です。

条件タイプは以下のとおりです。

条件タイプ	説明
しきい値	指定の値より大きい/小さい値を取得した場合にイベントを生成
平均からの偏差	直近の平均値と前回の平均値の差分が指定の値より大きい場合にイベントを生成
ベースラインしきい値	取得した値がベースラインに比べて大きい場合にイベントを生成 ベースラインは、1 週間前の 1 日のデータの 6 時間ごと(0:00-5:59、6:00-11:59、12:00-18:59、18:00-23:59)の平均値を算出して自動的に設定
状態の変化	指定の値から指定の値に変化した場合にイベントを生成
状態	取得した値が指定の値に一致/不一致の場合にイベントを生成
存在	値が存在する/存在しない場合にイベントを生成
値の変化	直近の値と前回の値による差分によってイベントを生成 値が大きい/小さい/一致/不一致を選択
範囲	範囲内/範囲外の値を取得した場合にイベントを生成
制限しきい値	指定期間内の合計値が指定の値を超えた場合にイベントを生成

## 4. パフォーマンストレンド

パフォーマンストレンドは、NetCrunch が収集した過去の値を表示する機能です。パフォーマンストレンドでは対象のカウンタから値の収集は行わず、パフォーマンスビューなどで収集した過去の値を表示します。

### 4.1. パフォーマンストレンドの利用方法

パフォーマンストレンドは、以下の手順にて利用できます。以下の手順では、例として[ノードメトリック]を使用しております。

1. メインメニュー→[ツール]→[パフォーマンスの傾向]を選択します。
2. [パフォーマンスの傾向]ウィンドウにて[ノードメトリック]を選択します。
3. 表示されたノードのリストから、対象のノードを選択します。
4. 表示されたカウンタのリストから、対象のパフォーマンスカウンタを選択して[追加]ボタンをクリックします。  
※チェックボックスを利用して、ノードを複数選択することも可能です。

パフォーマンストレンドでは、日単位、週単位、月単位といった表示単位でグラフを表示することが可能です。

## 5. レポート

収集した値からレポートを作成し、PDF ファイルのレポートを定期的にメールで送信することができます。また、NetCrunch の画面上にてレポートを表示することができます。

### 5.1. レポートの設定方法

レポートを送信するためには、通知先にメールアドレスを設定した NetCrunch のユーザーを指定します。ユーザーを作成する手順は以下のとおりです。

1. メインメニュー→[NetCrunch]→[NetCrunch システム]→[ユーザー&アクセス権マネージャー]を選択します。
2. [ユーザーアクセス権マネージャー]ウィンドウの[NetCrunch ユーザー]タブにて[+]ボタンをクリックします。
3. 追加されたユーザーに対して、ユーザー名や通知先などを設定し、[OK]ボタンをクリックします。  
※ [通知先]欄にメールアドレスを指定します。

レポートのデータ収集、送信先の設定について、以下に例示します。

以下の手順では例として、新たに作成した監視パックに対してレポートを追加しておりますが、ノードやマップ、自動監視パックにレポートを追加することも可能です。また、既存の監視パックを編集することも可能です。

1. メインメニュー→[NetCrunch]→[アラート通知]→[監視パックとポリシー]を選択します。
2. [監視パックポリシー]ウィンドウの[監視パック]タブにて、監視パックを作成したいフォルダを選択し、フォルダ画面左上の[+]ボタンをクリックします。
3. [アラート&レポート設定の作成]ウィンドウにて、[監視パック]をクリックします。
4. [監視パックの設定]ウィンドウの[データ収集のアラート]→[データコレクター]タブにて、[コレクターの追加]をクリックします。
5. [コレクターの追加]ウィンドウにて、追加するレポートをダブルクリックします。
6. [監視パックの設定]ウィンドウにて、追加したレポートを右クリック→[レポートコレクタースケジュールの編集]を選択します。  
※レポートを送信しない場合には、手順[8.]に進みます。
7. [Report Generation Schedule]ウィンドウにて、[スケジュール]ボタンをクリックして、スケジュールする時間単位を選択します。
8. [Report Generation Schedule]ウィンドウにて、レポートの送信先を設定の上、[保存]ボタンをクリックします。
9. [監視パックの設定]ウィンドウの[割り当て]タブにて、[ノードの追加]をクリックします。
10. [ポリシーにノードの追加]ウィンドウにて、監視パックを割り当てるノードを選択し、[OK]をクリックします。  
※チェックボックスを利用して、ノードを複数選択することも可能です。
11. [監視パックの設定]ウィンドウにて、監視パックの名前など、必要に応じて設定します。

## 5.2. レポートビューア

レポートビューアでは、手動にてレポートの表示や PDF ファイルへの出力が行えます。

1. メインメニュー→[ツール]→[レポート]を選択します。
2. [レポート]ウィンドウにて表示された項目から対象のレポート項目を選択します。
3. レポート項目毎に表示されるガイダンスに従い生成するレポート項目や期間などの情報を設定します。
4. [レポートを開く]を選択することで対象のレポートが表示されます。

レポートビューアにて生成したレポートは、[ダウンロード]アイコンを選択し表示される[名前を付けて保存]ウィンドウから PDF ファイルとして保存することもできます。



## 6. 仮想パフォーマンスカウンタ

仮想パフォーマンスカウンタは、SNMP などのカウンタを用いて計算式を設定し、NetCrunch の監視に使用する機能です。定義した仮想パフォーマンスカウンタを使用することで、計算式から算出した値を収集することができます。

### 6.1. 仮想パフォーマンスカウンタの定義

仮想パフォーマンスカウンタを新たに定義する手順は以下のとおりです。

1. メインメニュー→[NetCrunch]→[リソース]→[計算されたパフォーマンスカウンタ]を選択します。
2. [計算されたパフォーマンスカウンタ]ウィンドウにて、[仮想カウンタの追加]をクリックします。
3. [仮想カウンタの定義]ウィンドウにて、使用する監視方法を選択の上、[次へ]をクリックします。
4. [パフォーマンスオブジェクト名]などを設定の上、[次へ]をクリックします。
5. [カウンタ式]を設定の上、[OK]をクリックします。

手順[4.]の[パフォーマンスオブジェクト名]では、定義したカウンタが参照するインスタンスに影響いたします。例えば、SNMP の「Interface 64 bits」では、デフォルトでインスタンスに「ifEntry.ifDescr」が設定されております。「Interface 64 bits」を選択して定義した仮想カウンタは、「ifEntry.ifDescr」からインスタンスを選択します。

手順[5.]では、[挿入]ボタンからカウンタを追加することができます。カウンタの追加の際にインスタンスの選択が必要な場合には、「\_VCounter」を選択してください。「\_VCounter」は、仮想パフォーマンスカウンタにて使用できる仮想的なインスタンスです。監視に使用する際に選択したインスタンスに、「\_VCounter」の部分が置き換わります。

### 6.2. 仮想パフォーマンスカウンタの使用方法

定義した仮想カウンタは、「.NCVC.<パフォーマンスモニター名>.<パフォーマンスオブジェクト名>」という法則で表記されます。<パフォーマンスモニター名>には、SNMP や NT(Windows 監視)、LINUX などが表示されます。また、<パフォーマンスオブジェクト名>には、06.1.仮想パフォーマンスカウンタの定義の手順[4.]にて設定したパフォーマンスオブジェクト名が表示されます。手順について、以下に例示します。以下の手順では、イベントやパフォーマンスビューなどでカウンタを選択する段階を想定しております。

**SNMP 監視の場合：**

1. [SNMP カウンタの追加]ウィンドウにて[カウンタライブラリから選択]を選択し、[次へ]をクリックします。
2. [以下からカウンタを選択します]に対象のノード、[パフォーマンスオブジェクト]に「.NCVC.SNMP.<パフォーマンスオブジェクト名>」を選択します。
3. 表示されたカウンタとインスタンスの中から監視するものを選択し、[追加]をクリックします。

**OS 監視の場合：**

1. [\*\*\*カウンタの追加]ウィンドウにて[以下からカウンタを選択します]に対象のノード、[パフォーマンスオブジェクト]に「.NCVC.<OS 名>.<パフォーマンスオブジェクト名>」を選択します。  
※「\*\*\*」には Windows や Linux などが入ります。  
表示されたカウンタとインスタンスの中から監視するものを選択し、[追加]をクリックします。